

# 階級社会学における

## 「中間層」研究の理論的課題

### I. 内外における研究の動向

小 関 三 平

は し が き

去る日本社会学会第35回大会において、われわれは、わが国における階級研究の貧困を指摘し、若干の基本的課題を提起することを通じて、「現実的な日本階級社会学の構想への最初のステップ」を踏み出そうと試みた<sup>(1)</sup>。その際に提示されたわれわれの観点は、社会学への入門以来一貫して持たれてきたものであり、われわれがこれまでに行なってきたいかなる社会学研究への従事にあたっても、その根本前提の一つをなしてきたものである<sup>(2)</sup>。いま、これを改めて提示するなら、その骨子をなす主要な論点は下記のごとく整理される。

- (1) 勢力説および成層論における階級 (class) または階層 (stratum) の概念規定は、わが国の社会科学における通念に相反する。
- (2) 階級概念の基本的メルクマールとしては、生産過程における地位と役割を採り、複合的メルクマールを排する。
- (3) 従来この分野で大きな比重を占めてきた概念論議は、多くの場合、不毛であったし、今後は不要である。
- (4) 階級関係は、もっとも重要な「社会関係」の一つであり、社会体制によって規定され、社会構造を根本的に規定している。
- (5) 階級社会学の基本的課題は、社会学的分析用具の使用と他の社会学諸部門との連関への配慮にもとづきつつ、階級関係を多面的・立体的・動態的・具体的に分析することにある。

- (6) 階級社会学の出発点と主要方向は、一般的・抽象的理論の建設よりも、むしろ、時間的・空間的に限定された社会的状況の中での個別的・現実的研究に求められる。

このような観点の提示にたいしては、部会における討論の過程でなんらの根本的批判をも受けなかったが、階級概念の多義性についての詳細な吟味と、現代日本の階級関係についての具体的な分析を欠いた点で、われわれの報告は一部の不満をひき起こした。<sup>(3)</sup>この不満は、ある意味では不当であるが、またある意味では正当である。というのも、そうした理論的作業を説得力をもって行なうに十分な時間はわれわれに許されてなかったが、その不可欠な重要性については、階級理論の発展を願うすべての研究者が認めざるをえないからである。もちろんこうした理論上の諸作業—とりわけ実証的な階級分析—は、決して容易ではない。だが、すでにわれわれの基本的な観点と視角を一応提示したのであってみれば、今後はむしろ、階級社会学の建設過程に横たわるさまざまな理論的問題の一つ一つを、いっそうインテンシヴに、またいっそう具体的に、考察し解決して進まねばなるまい。デッサンをすませて、細部の彫琢を始めねばならないのである。

この小稿は、そうした前提にもとづいて、現代階級理論における重要な論争的トピックスの一つとして「中間層」問題をとりあげ、最近のいくつかの文献を参照しつつ、この研究分野に認められる主要な傾向を概観したうえで、比較的知られることの少ないソビエトの研究を手掛りとし、それを吟味することを通じて若干の理論的課題とその意義を明かにしようとするものである。

註 (1) 「日本社会学会第35国大会報告要旨」(1962年10月)

- (2) 但し、こうした見解の主張を、あまり明白な形では行なって来なかった。折にふれてこのことに論及した機会があったにしても、それはしばしば不徹底で、また多くの部分的誤りを含んでいた。

- (3) たとえば、富永健一氏の発言は、この点にかかわるものであった。氏に対する私の反論は、その表現と説得力において満足すべきものではなかったと、深く反省している次第である。

## 1. 戦前日本における主要傾向

いわゆる「中産階級」・「中間階級」・「中間層」をめぐる論議は、ここ数年来、広く一般の関心と呼びつつある。これらの言葉は、あるいは総合雑誌の目次の中に、あるいは政治家の選挙演説の一節に、そしてまたあるいは床屋談議の合間にさえ、読まれ聞かれ、語られる。社会学者の間でも、（むしろ学界外における関心の高まりに刺戟されて）このテーマを取り上げる者がふえ、いくつかの実証的研究も現われ始めた。しかし、その理論的水準はまだ低くて、オリジナルなものはあまり見当たらない。それというのも、なにぶん関心が高まったのが最近のことであり、また、性急なジャーナリズムの要求に応じるための安易さに流れたせいも多分あって、理論的な掘り下げがほとんどなされず、外国—とりわけアメリカ—の理論の紹介ないし祖述、あるいは証明に、もっぱら努力が払われてきたからである。

しかし、この問題をめぐる論議そのものは、決して新しいものではない。その起源を、一般に云われているように「ベルンシュタイン＝カウツキー論争」に求めるならば、すでに70年<sup>(4)</sup>に亘る歴史を持つわけであり、そのいわば＜系譜学＞は少なからざる資料と努力を必要とするであろう。もちろん英語の middle class(es) や仏語の classe(s) moyenne(s) という言葉の起源は、それよりもはるかに古い。

わが国にあっては、すでに大正中期(1920年頃)にこの論議が＜輸入＞され、やがて襲いかかった大不況の中で、1930年代前半にかけて、「中等階級」ないし「中間階級」—とりわけ「智識階級」・「新中等階級」・「新中間階級」・「俸給生活者」・「給料生活者」・「サラリーマン」・「洋服細民」—の運命が論じられ、また「サラリーメン・ユニオン」の運動が展開されたのである。この時期に出た資料と文献は、かなり多量にのぼり、いまだに綿密な整理がなされていないが、<sup>(5)</sup> 少なくともその論議の白熱化と深刻さにおいて、今日のそれを上まわっていたことは明らかである。とりわけ、米田庄太郎「現代智識階級運動と成金デモクラシー」(1919)・山川均の「中産階級滅亡論」(1922)・

大内兵衛の「俸給生活者の没落とその運動」(1923)・池田竜蔵の「中間階級の本質と使命」(1923)・東京府の「東京市及近接町村中等階級生計費調査」(1925)・小池四郎の「俸給生活者論」(1929)・青野季吉の「サラリーマン恐怖時代」(1930)・社会立法協会編「給料生活者問題」(1933)・向坂逸郎「知識階級論」(1935)などは、(その一部はすでに今日では入手困難だが)貴重な古典として、しばしば論及されている。それ以前に、すでにマルクス主義が入っており、カウツキーはもちろんレーデラーについてもすでに知られていたから、論議の焦点は、いきおい資本主義下における中間階級の運命に向けられ、<sup>(6)</sup> もっぱらマルクス主義者ないし社会民主主義者のイニシャティヴのもとに、帰するところはいわゆる「一路衰退説というドグマ」となりがちであった。<sup>(7)</sup> 当時の論議の理論的基盤は、マルクス自身の著作よりはむしろドイツ社会民主党の系統に属する理論家たちの見解に主として依存し、また利用された主な資料は、官庁の生計調査に類するものであった。但し、いわゆる講壇社会学者に属すべき米田庄太郎が、逸早くこの問題を取り上げて、当時なりに社会学的な分析を試みたということは、日本社会学の草創期に果たした彼の多面的な業績の一つとして、改めて注目にあたいる。彼は、その頃、京都大学において講義を担当するかたわら、社会問題の諸相にかんする生き生きとした分析を、雑誌誌上に発表して、学問と実践の両面において重要な役割を果たしつつあった。そして、「中等階級」の概念についても、慎重に吟味し、これを明確に「旧中等階級」(小企業者階級—1. 手工業者階級・2. 小商人階級・3. 自作小農民)と「新中等階級」(智識階級—1. 独立自由職業者階級・2. 月給取階級)とに区分したのであった。<sup>(8)</sup> 彼こそは、まさしくこの分野のパイオニアであったと云わねばならない。ただ、彼のこうした先駆的業績が、後続の社会学者たちによって継承・発展せしめられなかったのが惜しまれるのである。もちろん、その後の社会的・政治的諸事情が、社会問題の具体的な研究を阻んだのであった。

註 (4) 田沼肇「“中間階級”論の展開」(田沼編「現代の中間階級」、大月書店・1958)、9頁。

(5) 松成他「日本のサラリーマン」(青木書店・1957) および、石川弘義・宇治川

誠「日本のホワイトカラー」、(日本生産性本部・1961)の末尾に、比較的詳しいリストがある。

- (6) その頃の知的雰囲気については、向坂逸郎「知識階級論」(改造社・1935)を見ればよくわかる。また、カウツキーの *Die Intelligenz und die Sozialdemokratie* (*Die Neue Zeit*, XⅢ, 1895) の訳はツェトキシンの論文そのとともに、向坂・鳥海訳「インテリゲンチヤ——その特質とその将来」(大衆公他と論社・1930)に収められている。
- (7) 田沼、前掲論文、11頁。
- (8) 米田庄太郎「現代社会問題の社会学的考察」(改造社・1922)第1章第2節。

## 2. 戦後日本における主要傾向

ファシズムの勃興から太平洋戦争の終結に至る社会科学の＜暗黒時代＞には、階級論など、もちろんありえなかった。学問的空白の時期が敗戦後しばらく続いたのち、戦時中の暗いアカデミーの片隅でひっそりと＜灯＞を守ってきた社会学者たちが、ようやく活動を始めようとした頃には、すでに新しい事情が生じていた。激動する社会にあって、マルクス主義者たちは社会学を見捨てて批判と啓蒙に身を入れ始め、他方では若い世代の社会学者がアメリカの理論の摂取に熱中し出していた。したがって、社会学界で再び「階級論」が復活したときには、その内容は、当然まったく新しい装いをまとうて現れたのである。「成層 (stratification)」論が席捲し出したのは1950年頃からであり、山本登や杉政孝は、この新しい動きの尖端に立っていた。<sup>(9)</sup>複合的メルクマールの導入や帰属意識の調査が行われ始めたのもこの時期である。同時に、社会心理学が、そこに根をおろした。

こうした学問的土壌の形成されつつあったさなかに、1955年頃から流入し始めた「大衆社会論」は、社会学界の内外に、強烈なインパクトをもたらしたのである。そして、大衆社会論争は、1957年に到ってクライマックスに達したが、その年はまた、「新中間層」論争の始まる年ともなった。もちろん、大衆社会論と、新中間層論は、理論的にも实际的にも一体のものとして現われ、今日なお、その底流は根強く残っており、あるいは俗流評論において、あるいは意識調査において、大衆社会論的な新中間層の把握は、社会学者の一部によ

て支持されている。ただ、時間的には、両者にややズレがあり、大衆社会論の検討の過程で、新中間層論が問題として浮かび上がり始めたようにみえるにすぎない。

いずれにせよ、戦後における「中間階級」ないし「中間層」研究にとって、1957年は、一つのエポックとなった。加藤秀俊の「中間文化論」のような学問以前の次元に属するものはともかくとして、高橋徹・城戸浩太郎・綿貫譲治らの「集団と組織の機械化—官僚制化をめぐる諸問題」<sup>(10)</sup>と、この年に翻訳されて出たガイガーの「あたらしい階級社会」(1948)・ケーニヒの「現代の社会学」(1949)・ミルズの「ホワイト・カラー」(1951)など—とくに高橋らの論文とミルズの著作は、きわめて大きな影響を与えた。これらの間には、ニュアンスとアクセントの相違はあるにしても、次のような点で、かなり類似性を示している。

- (1) マルクス主義に対する批判的態度
- (2) 「新中間層」の増大と専門的技術の強調、および「旧中間層」の軽視。
- (3) 官僚制機構における「疎外」の必然性と政治「無関心」の強調。
- (4) 社会心理学的方法への依存。

つまり、同じく「中間階級」ないし「中間層」の論議とはいいいながら、戦前(1920~1935頃)のそれと戦後(1955年~ )のそれとでは、まったく大きなへだたりが認められるのである。その論議の対象は、いわばドイツ的 *Mittelstand* ないし *Mittelklasse* からアメリカ的 *middle class* ないし *middle stratum* へと移り、その理論的枠組は、マルクス主義的社会政策学から大衆社会論的社會心理学に変わって、その分析の帰結は、いわば＜窮乏化＞説から＜疎外化＞説へと化したのである。

しかしながら、少なくとも社会学界内部を席捲するとみえたこの種の中間層理論は、社会学共通の広場に登場したとき、マルクス主義経済学者の批判にあわざるをえなかったのである。大衆社会論、したがってまた新中間層論が論壇を賑わしたその1957年に、黒川俊雄の「新中間層の諸問題」<sup>(12)</sup>・田沼肇の「日本における「中間層」問題」<sup>(13)</sup>・吉原次郎の「新中間層の再検討」<sup>(14)</sup>・松成義衛らの「日本のサラリーマン」などが逸早く現われた。黒川のは、一種のアポロギー

的色彩が強いものであったが、田沼のは、統計資料を用いて、かなり説得力をもって、実証的事実の提示を試みたものであった。これらを契機として、マルクス主義者による反撃が始められ、ドリーユ・デュムラン・シュラクマン・セミヨーフらの論文を訳載した田沼編の「現代の中間階級」(1958)・グラントの「社会主義と中間階級」(1953)の訳本(1959)・ブーヴィエ＝アジャムやミュリーらの論文を収録した「カイエ・デュ・コムニスム」誌特集(1960)の翻訳「労働者階級と中間階級」(1961)などが続いて出ている。

こうしたマルクス主義的中间層論の展開過程に相応じつつ、(それと直接の関連はないにしても)社会学界内部にも、新しい一つの傾向が現われ始めている。それは、中間層についての大衆社会論的発想に完全な同意を与えることができずに、もっとオリジナルな中間層理論を探ろうとするものであるが、さりとて徹底したマルクス主義に入りこもうとはしないという立場の出現である。社会学内部において、中間層研究は、明確なマルクス主義者を標榜する者を見出だしえないでいるが、それに比較的近い者から、まったくかけ離れた者に到るまで、多様な<分化>の兆しをみせている。そして、この分化は、徐々に進行しつつ、いくつかのカテゴリーを新たに現出せしめる可能性をも内包している。富田富士雄の「中間階級とインテリゲンチヤ」(1957)<sup>(15)</sup>や本間康平の「中間階層に関する論議とホワイトカラーの問題」(1959)<sup>(16)</sup>などは、マルクス主義に近い立場に立つものに属している。しかし、これに対して、1960年以降に現われ始めた「中産階級化」政策をめぐる論議を契機として、これに関心を抱く社会学者も現われている。尾高邦雄の「日本の中間階級—その位置づけに関する方法論的覚え書」(1964)は、こうした関心に発するきわめて独特な方向を指している。<sup>(17)</sup>だが、尾高の階級概念は、そのイデオロギー的背景とともに、小山陽一によって、きわめて明快な批判をこうむった。<sup>(18)</sup>

こうした<分化>傾向が、ひいては階級論一般にも認められるのは、むしろ当然である。とくに、ダーレンドルフが紹介され、<sup>(19)</sup>ギェルヴィッチが翻訳されるに及んで、<sup>(20)</sup>混乱はますます拍車をかけられた感がある。今や日本における「階級」ないし「階層」の研究は、向井利昌の「階級構造の理論」(1963)の

ような勢力説から、田中清助、野崎治男・小山陽一らのマルクス主義に到るまでの間に、さまざまな中間的・折衷主義的立場を含んでいる。浜島朗の「社会学における階級研究の立場と方法について」(1956)<sup>(21)</sup>や富永健一の「階層と階級」(1961)<sup>(22)</sup>、八木正の「势力的階級論の再検討」(1962)<sup>(23)</sup>などは、こうした混乱の多少とも端的な反映といわねばならない。

こうした階級理論における新しい分化と混乱の中で、折衷主義的な観点に立って書かれたかなり具体的・実地的な分析として、石川弘義・宇治川誠の「日本のホワイトカラー」・(1961)・岸本英太郎編「現代のホワイトカラー」(1961)・寿里 茂ら日本社会構造研究会員による「日本のホワイトカラー」(1964)などが挙げられる。これらは、いずれも、啓蒙的意義をもっているが、寿里らのが比較的に社会学的な枠組をそなえているのを別とすれば、あとの二つは、明確な統一的枠組をもたない。

このようにして、ごく大ざっぱに言えば、戦後の日本社会学における中間層ないし中間階級にかんする研究は、つぎのごとくに類型化されるであろう。

(A) 大衆社会論的枠組によるもの

- a) 疎外理論    b) 意識調査    c) その他

(B) マルクス主義的枠組によるもの

- a) マルクス弁護論    b) イデオロギー的批判    c) その他

(C) 折衷主義的枠組によるもの

だが、これらのいずれの間からも、圧倒的に有力なものは、今のところ現われるに到っていないようである。

註 (9) たとえば、山本登「アメリカ社会学における階級理論の特質」

(人文研究・2の9・1951) 杉政孝「アメリカ社会学における階級研究」(思想・331号1952)、山本登「社会的階層化の概念」(人文研究・4の3・1953)

杉 政孝「社会成層と階級」(社会学評論・12号・1953) など。

(10) 講座「現代思想」第8巻(岩波書店・1957)所版。

(11) もっとも、ガイガーのそれは、大衆社会論というわけでもない。

(12) 「思想」、398号・1957、

(13) 「中央公論」、72巻12号・1957。



- (14) 「前衛」、134号・1957.
- (15) 講座「社会学」第6巻（東大出版会・1957）第1章3節の2.
- (16) 「社会学評論」、36号・1959.
- (17) 「日本労働協会雑誌」22号・1961.
- (18) 講座「現代社会学」第1巻Ⅲ、（有斐閣・1964）
- (19) Dahrendorf, R.; Soziale Klassen und Klassenkonflikt in der industriellen Gesellschaft (Ferdinand Enke, 1957).
- (20) Gurvitch, G.; Le concept de classes sociales de Marx à nos jours. (P.U.F., 1954)  
（佐々木沢「社会学階級論」、誠信書房・1959）
- (21) 「日本社会学の課題」（有斐閣・1956）所収
- (22) 講座「現代社会心理学」第8巻（中山書店・1961）所収
- (23) 「社会学評論」49号・1962.

### 3. 西欧社会学における二・三の断面

他方、眼を海外に転ずれば、ここでもまた「中間階級」研究は百花齊放の感があり、この名を冠した単行本・論文のリストを作成すれば、それはきわめて長いものとなるのである。もちろん、わが国の研究は、これら海外の動向に敏感であり、その一部は逸早く紹介されてきたのであるが、知られていない研究はさらに多い。この分野の研究者によって発表されている業績のうち、知り得た限りを挙げて見ても、その多彩さは驚くべきものである<sup>(24)</sup>。まずこの種の研究は戦前のドイツのとくに1930年前後に続々と発表されて来たのであるが、主としてノインデルファーに従ってその系譜を時間的に追うなら、カウツキー（1895・1899）シュモラー（1897）ヴェルニッケ（1909）・レーデラー（1912・1926）らのようにすでにわが国でも知られている古典的研究に続くものとして、ズッセンゲート（1927）・クラカウエル・モイゼル（1930）・エンゲルハルト・アルブレヒト・ディルクス・フィッシャー（1931）・グリュンベルク（1932）・ドライフス（1933）などのものが続いている。これらの主題は、Intelligenz, Mittelstand, Angestellten としてとらえられている。フランスのものとしては、戦前には、フंक＝ブレンターノ（1903）・アルテュール（1929）・アルヴァクス（1939）の名を知りうるに止まるが、イギリスではカ

ーサウンダーズ (1928) ・パーム (1926) ・アメリカでは、コービン (1922) エリス (1923) ・アボット (1925) コリイ (1935) ・ホルコム (1940) が挙げられる。戦後ヨーロッパでは、再びこの種の研究が徐々に盛んとなりつつあり、クローネルが最近作成したリストによって見ても枚挙に暇のない程の多量に達している<sup>(26)</sup>。その中からごく一部を拾ってみても、たとえば、ドイツではベロウ (1950) ・シユタンマー (1959) ・バイヤー (1961) などがあり、スイスではマールバッハ (1942) ・ベルギーではクレマー (1955) 、スエーデンではクローネル自身の多数の研究 (1928～ ) のほかにゼーデルベリ (1956) ゴールトルンド (1940・1942) などがあり、フランスでは、先に挙げたマルクス主義者たちは別としても、ソヴィ (1954) ・クロジエ (1955～) ・ブルトン (1956) ・ジロー・ユッツ (1961) らがとくに著名である。またイタリアや社会学の文献目録によれば、ピスケル (1946) ・ヴァッレ (1953) ・ミッシローリ (1954) ・ストゥルツォ (1957) などの名がみられ、オランダではクリトの研究 (1947) がある。他方、イギリスでは、リュウイスとモード (1949) ・ボンハム (1954) のものがあり、アメリカでは、グレイソン (1955) のものがミルズ以後に出ている。

さらに、最近われわれの接した二、三の文献についてみれば、イタリアの A ・ A ・クロサーラは、「中産階級と革命的諸階級の経済的一量化的定義のための諸基準」 (1952) において、純然たる数理経済的見地に立って、中流所得階層の境界設定を試みており、同じくイタリアの S ・ S ・アックアヴィーヴァ<sup>(27)</sup> は、「オートメーションと新しき階級」 (1958) の中で、オートメーションの導入によってもたらされた「第二次産業革命」に伴う「新しき (技術的) 専門家階級 (la nuova classe di specialisti)」の勃興の意義を強調し、社会的協同に対する彼らのイニシャティヴと統制的機能の増大を予想している<sup>(28)</sup>。他方、ドイツの P ・ハインツは、チリのラテンアメリカ社会学院における講義録「社会学講義」 (1960) の中でとくに「中間諸階級」という一章を設けているが、主として社会心理的側面を重視して、その特質を「相対的に顕著な垂直移動」と「個人主義的競争」の二つによって生じる「過渡的性格 (carácter

transitorio)」を強調している。<sup>(29)</sup> またドイツでは、先述のL・ノインデルファーは「サラリーマン」(1961)において、この分野の研究の歴史を概観したのちに、従来のアプローチが「階級的思考 (klassendenken)」を偏重することによって、結局その本質を明かにしえないで終わっていると主張し「サラリーマンに固有な (angestellstenspezifische)」行為とプレスティジの基盤としての「サラリーマン機能 (Angestelltenfunktion)」を企業レベルにおいて実証的に追求している。<sup>(30)</sup> さらに先述のスウェーデンのF・クローネルは、この分野の業績においてヨーロッパ全体に知られているようであるが、その最も新しい著作「サラリーマンの社会学」(1962)において、マルクス主義から成層論に到る一切の階級的アプローチを、上下の対極を前提とした「権力理論 (Machttheorie)」とみなし、現代社会におけるサラリーマンの積極的な定義のためには、これまた「機能理論 (Funktionstheorie)」こそ有効であると主張している。<sup>(31)</sup>

しかし、これらの立場は、その基本的な立脚点と観点において、われわれがさきに提示した前提や今後追求したいと考える方向に合致しない。たとえば、所得階層をもって階級としているクロサーラは論外としても、アックアヴィーヴァは「専門家階級」なるものの特殊性と社会的影響を不当に誇大視して、資本主義的生産—所有関係による社会構造の根本的規定を軽視している。ハインツの分析は、一面において社会心理学的興味を唆りはあるが、中間層の社会的位置づけに対する客観的条件の分析がなされず、また社会的上昇移動のチャンスを過大視している。また、ノインデルファーとクローネルの場合は、企業における労働過程の中での機能をインテンシヴに分析することはよいとしても、「労働者機能 (Arbeiterfunktion)」からの区別に重点がおかれすぎて、サラリーマンと他の労働者との共通の条件を明かにする点において不十分であるし、そもそも階級論的アプローチを否定しているという点で、われわれの観点と決定的に相違しているのである。

しかし、同じく西欧社会学にあっても、他方では、これらに根本的に対立するマルクス社会学者の一群がある。たとえば先述のA・グラント (イギリス) がそうであるが、最近のフランスにおけるこの方面の最大の成果としては、M

・ブービエ＝アジャムとG・ミュリィの労作「フランスの社会的諸階級」(1963)が、まず挙げられねばなるまい。彼らは、「中間諸階級と云われているもの」という慎重な見出しの一章を設け、そこでは、まずいわゆる「中間階級」論のいくつかの例を引きつつその混乱と矛盾を衝き、そこに横たわる「誤った公準 (postulat faux)」と、中間層の「階級」的独立性を強調したり階級対立を否定したりする立場の幻想的性格を批判している。彼らによれば、自由業者・サービス業者・職人・農氏・商人のみが、一定の条件をそなえている限りにおいて、「習慣への譲歩によって」中間階級と呼ばれうるにすぎず、階級というよりはむしろ「多様な諸集団のきわめて不調和な総体 (ensemble assez hétéroclite)」とされる。しかも、この一群は、独占資本主義の発展に伴なって「独立性の喪失」と「プロレタリア化」を免れないとされているのである。<sup>(23)</sup>

このブービエ＝アジャムとミュリィの著作は、最新の学問的諸成果を採り入れた異色の労作であり、一つの社会の階級構造についての実証的・包括的研究として、マルクス主義社会学者が生んだほとんど最初の業績といわねばならない。従来マルクス主義者たちの多くの階級論なるものは、ともすれば、単なる原理論や単なるイデオロギー批判に終始しがちで、実証的・科学研究としては、もっぱら労働者階級の<基幹的>部分を対象とするものに限定されがちであった。とりわけ、このことは日本のマルクス主義階級論について云えるのであり、包括的にして実証的な研究はいまだに生み出しえないのが現状であるといっても過言ではない。但しブービエ＝アジャムとミュリィのものも、「中間階級」の理論的分析としては、これだけでは充分であるまい。すでに「カイエ・デュ・コムニスム」誌上に発表された論文<sup>(83)</sup>を含めても、なおかつ、それは不充分であろう。しかしながら、史的唯物論と社会学についての深い素養とその見事な総合—単なる<折衷>ではなく、あくまで前者を基礎としての一において、われわれの範とするに足りるものである。それは、単なるマルクス弁護論にも、また単なるブルジョワ社会学の批判にも止まらず、それらを踏まえたうえで、さらに社会の階層構造の上部から下部に到るまで、高度の

実証性をもって分析している点で、説得力をもっている。

- 註 24 あまり多数に及ぶので、別の機会に列挙する。
- 25 Neundörfer, L.; Die Angestellten. (Ferdinand Enke, 1961)
- 26 Croner, F.; Soziologie der Angestellten. (Kiepenheuer & Witsch, 1962.)
- 27 Crosara, A. A; Criteri per la definizione economico-quantitativa della classe di reddito medio e delle classi rivoluzionarie. (Gregoria Editrice, 1942)
- 28 Acquaviva, S. S.; Automazione e la nuova classe (Società Editrice il Mulino, 1958)
- 29 Heintz, P.; Curso de sociología (Editorial Andres Bello, 1960)
- 30 Neundörfer, op. cit.
- 31 Croner, op. cit.
- 32 Bouvier-Ajam, M. et Mury, G.; Les classes sociales en France, tome II. (Éditions Sociales, 1963)
- 33 ミュリーの「中間諸階層の科学的定義のために」とブーヴィエ＝アジャムの「フランスにおける新“中間階級”は、小出訳「労働者階級と中間階級」(新日本出版社・1961)に訳載されている。

#### 4. ソビエト社会学における展開

さて、こうした西欧マルクス主義社会学者たちの研究の進展と並んで、いま一つのきわめて注目すべき動きがある。それは＜ソビエト社会学＞のめざましい発展にほかならない。周知のようにソビエト社会学は、あくまで史的唯物論に立脚するものであり、要するにマルクス主義社会学なのであるが、その実践的課題は、大別して二つの側面に区別される。その一つは、共産主義の移行過程に横たわる現実的な諸問題の解決に資すべき科学的知識の開発であり、もう一つは、資本主義社会における支配階級のイデオロギーを暴露するためにも必要なブルジョワ社会学に対する徹底的・原理的な批判である。ソビエトにおける社会学は、もともとこうした意図に発して成長してきたものとみえるが、今日では、党科学アカデミヤ哲学研究所からコンスタンチノフ・オシポフ・セミ

ヨーノフ編の「今日のマルクス社会学とブルジョワ社会学」<sup>(34)</sup>が公刊され、多数の学者の論文が収録発表されるに到っており、さらに、「ソ連邦における社会学」<sup>(35)</sup>および「社会学的研究—マルクス主義社会学の諸問題」<sup>(36)</sup>などが、近く刊行される予定である。こうした成長発展の過程で、ソビエトの社会学者が西欧社会学について蓄積しつつある知識は、今やかなり高度なものであり、コンスタンチノフ他編の前掲書の文献リストには、パーソンズ・マートン・ミルズはじめ主要なアメリカ社会学者のほとんどが挙げられている。

ソビエトにおける＜中間層研究＞は、もっぱらブルジョワ社会学批判の文脈において生れ、育ってきたものであった。この方面でもっとも有力な研究者としてイニシャティヴをとってきたものは、B・セミヨーノフであるようにみえ、彼の一連の著作は、「中間階級」についての神話と資本主義的現実」<sup>(37)</sup>を始めとして、「現代ブルジョワ社会学における階級および階級闘争にかんする非科学的諸理論」<sup>(38)</sup>（1958）から「現代ブルジョワ社会学における階級闘争の問題」<sup>(39)</sup>（1959）へと続いている。またB・チュプラコフも「現代資本主義社会の諸階級について」<sup>(40)</sup>（1959）を発表している。こうしたソビエト階級論の基本的前提の上に、やがて、独自の立場にもとづく実証的・個別的研究が、中間層を対象として行なわれ始めるのであり、その意味で、二つの単行本が注意を惹きつける。一つは、A・И・シュネエルソンの「資本主義下の都市中間層」<sup>(41)</sup>（1961）であり、他の一つは、党科学アカデミヤ世界経済・国際関係研究所から出たГ・Φ・アレクサンドロフ編の「現代資本主義社会の都市中間層」<sup>(42)</sup>（1963）であるが、とくに後者は、驚くほど豊富な文献と資料を用いた多数学者の協同研究成果として注目に値し、独自の学問的展開といえる。

こうした、ソビエトの中間層研究の系譜については、今後詳細に亙ってあとづけねばならないが、そうした包括的作業に先立って、まずこうした対象領域におけるいわば＜ソビエト的原則＞を知り、それをわれわれ自身の主体的立場に立って吟味しなければなるまい。そうした学問的作業をなしえることによって、非西欧的世界の新しい社会学の息吹きにふれることもできるし、また、われわれがこれまで立って来た地点を、あらためて見直し、再検討することもで

きるのである。アメリカ社会学一辺倒の時期がようやく終り、われわれ自身の道を見定め踏みしめるべき今日の時点において、このことはいっそう重要かつ有益とならざるをえない。今や、日本社会学自体が、全体として一つの大きな転換点にさしかかっている。開け放たれようとする〈世界社会学への窓〉から身をのりだして、遠く広く見はるかすべき時が、やってきているのである。この観点に立って、われわれは、ソビエトにおける中間層理論についてのやや立ち入った紹介と検討を、次章において行なうことにしたい。

(‘64. 9. 15)〔本稿未完〕

- (34) Академия Наук СССР; Марксистская и буржуазная социология сегодня. («Наука», 1964)
- (35) Социология в СССР. («Мысль», 1964)
- (36) Социологические исследования. Проблемы марксистской социологии. («Наука», 1964)
- (37) Семенов, В. С.; Миф о «средних классах» и капиталистическая действительность (Вопросы Философии, V., 1957)  
(この訳は、田沼編の前掲書に収録されている)
- (38) Семенов, В. С.; Антинаучные теории о классах и классовой борьбе в современной буржуазной социологии. (Коммунист, № 3, 1958)
- (39) Семенов, В. С.; Проблема классов и классовая борьба в современной буржуазной социологии. (Госполитиздат, 1959)
- (40) Чепраков, В.; О классах современного капиталистического общества. (Коммунист, № 5, 1959)
- (41) Шнеерсон, А. И.; Городские средние слои при капитализме. (Изд-во Впш и АОН, 1961)
- (42) Академия Наук СССР; Городские средние слои современного капиталистического общества. (Изд-во АН СССР, 1963)

## **Theoretical Problems of the "Middle Class" Study in the Light of Sociology of Social Class**

### **Résumé**

#### **I. Main Trends among Japanese and Foreign Sociologists**

It is said that the studies in the "middle class" began with the famous debate between Bernstein and Kautsky. In the prewar Japan, the middle class problem was one of the most popular topics that attracted the attention of the social scientists. In those days, many of the arguments were deeply influenced by marxist point of view, and the initiative was taken by such German social democrats as Lederer. It was argued that all the middle class would inevitably decline and therefore its destiny could not be different from that of the proletariat.

After the World War II, however, especially since 1950's the middle class problem has been approached from a different angle and with a new method. In this case, the initiative is taken by the so-called "mass-society theorists" under the influence of American social psychology. It is emphasized that, while the old middle class perseverely survives, the new middle class (the "white-collar") remarkably increases and suffers the "alienation" in the bureaucratic organizations. This theory insists the "fallacy of Marx's dichotomy" and the differences between the white-collar and the "blue-collar". Thus it is asserted that one of theoretical evidences is offered to the criticism of the marxist class theory.

Recent studies that we know also belong to either of these two types of theory—the marxist one or the non-marxist one. Among these recent studies, the development of the middle class study in the USSR is conspicuously remarkable. The investigation of the Soviet studies, which, of course, are based on the marxist principles, will certainly provide us an important key to this problem, through an intensive reexamination of marxist class theory in which the debate about the middle class had its origin.